

『ノルウェイの森』の隠蔽
—「螢」「めくらやなぎと眠る女」「風の歌を聴け」と比較して—

三宅 香帆

Concealment in *Norwegian Wood*:
Comparison with “Firefly”, “Blind Willow, Sleeping Woman”, and *Hear the Wind Sing*

Kaho Miyake

Abstract

Haruki Murakami's *Norwegian Wood* contains scenes based on his short stories “Firefly” and “Blind Willow, Sleeping Woman.” The comparison of related scenes between *Norwegian Wood* and these short stories reveals some motifs that seem to be intentionally deleted: the tennis court and others in “Firefly” and the poem of the willow and the image of spring where flies nest in “Blind Willow, Sleeping Woman.” These motifs are related to the girl majoring in French literature in *Hear the Wind Sing*, whose connection with *Norwegian Wood* seems to be intentionally concealed by Murakami.

はじめに

『ノルウェイの森』は、村上春樹長編作品の中で唯一とっていい「リアリズム小説」である。舞台となる学校は村上の母校である早稲田大学キャンパスを彷彿とさせ、主人公の住む寮の風景や描かれる時代の空気には村上の青春時代が窺える。自然と、読者は村上の実体験と『ノルウェイの森』を重ね合わせて読む。小説の中で描かれた恋愛事情、人間関係に作家自身の人生を見る。『ノルウェイの森』で村上は珍しくあとがきを付し、本作が「きわめて個人的な小説」と述べる。読者としてはどうしてもヒロイン「直子」と「僕」の物語を、村上の実体験を半ば自伝的に綴ったものとして読んでしまう部分があるだろう。

しかし本当に『ノルウェイの森』は村上春樹が「個人的」なことを最も正直に語った作品なのだろうか？ 『ノルウェイの森』がリアリズム小説であればあるほど、そこにむしろ意図的に隠されたものがある、とは読めないだろうか。そしてその「隠されたもの」を見つけるとき、同時に読者は村上春樹がもっとも「隠したかったもの」を見つけることができるのではないか。

本稿では、村上春樹初期作品「螢」「めくらやなぎと眠る女」「風の歌を聴け」と『ノルウェイの森』を比較しながら、村上が『ノルウェイの森』に何を隠しているのか、何を隠したかったの

かを考える。

1. 遠ざかる「テニス・コート」——「螢」と比較して——

『ノルウェイの森』のあとがきで、村上は以下のように述べる。

まず第一に、この小説は五年ほど前に僕が書いた『螢』という短編小説（『螢・納屋を焼く・その他の短編』に収録されている）が軸になっている。僕はこの短編をベースにして四百字詰三百枚くらいのさらりとした恋愛小説を書いてみたいとずっと考えていて、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』の次の長篇にとりかかる前のいわば気分転換にやってみようというくらいの軽い気持でとりかかったのだが、結果的には九百枚に近い、あまり「軽い」とは言い難い小説になってしまった。たぶんこの小説は僕が思っていた以上に書かれることを求めているのだらうと思う。¹

「螢」のあらすじは『ノルウェイの森』の二・三章がほぼ重なっているため、『ノルウェイの森』の原型として理解されている。²確かにそのあらすじの類似には疑いの余地がなく、『ノルウェイの森』のベースとなる物語として「螢」を読むことができる。しかし実際に「螢」と『ノルウェイの森』を比較してみると、意外な違いが見えてくる。

「螢」の中で、彼女³は僕と五月の日曜日の午後に散歩する場面から登場する。

僕と彼女は四ツ谷駅で電車を降りて、線路わきの土手を市ヶ谷の方向に歩いていた。五月の日曜日の午後だった。朝方降った雨も昼前にはあがり、低くたれこめていた鬱陶しい灰色の雲は、南からの風に追われるようにどこかに消えていた。くっきりとした緑の桜の葉が風に揺れて光っていた。日射しにはもう瑞々しい初夏の匂いがした。すれ違う人々の多くは上着やセーターを脱いで肩にかけていた。テニス・コートでは若い男がショート・パンツ一枚になってラケットを振っていた。（「螢」 p20）⁴

五月の気持ちのいい初夏の風景である。歩いていた彼女は、水飲み場で立ち止まる。

¹ 『ノルウェイの森（下）』（1988年、講談社）259頁参照。

² 平野芳信『村上春樹と《最初の夫の死ぬ物語》』（2001年、翰林書房）

³ 『ノルウェイの森』で直子にあたる女性は、「螢」では「彼女」としか呼ばれていない。

⁴ 本稿の「螢」の引用はすべて『螢・納屋を焼く・その他の短編』（1987年、講談社文庫）から。また『ノルウェイの森』の引用は、あとがきを除いてすべて『ノルウェイの森（上）（下）』（1987年、講談社文庫）による。どちらも、下線は筆者が引いたものである。

彼女は水飲み場の前で立ち止まって、ほんのひとくちだけ水を飲み、ズボンのポケットからハンカチを出して口を拭いた。それからテニス・シューズの紐をしめなおした。(「螢」 p21)

この場面を『ノルウェイの森』で確認する。

僕と直子は四ツ谷駅で電車を降りて、線路わきの土手を市ヶ谷の方に向けて歩いていた。五月の半ばの日曜日の午後だった。朝方ばらばらと降ったりやんだりしていた雨も昼前には完全にあがり、低くたれこめていたうっとうしい雨雲は南からの風に追い払われるように姿を消していた。鮮やかな緑色をした桜の葉が風に揺れ、太陽の光をきらきらと反射させていた。日射しはもう初夏のものだった。すれちがう人々はセーターや上着を脱いで、肩にかけたり腕にかかえたりしていた。日曜日の午後のあたたかい日差しの下では、誰もがみんな幸せそうに見えた。土手の向こうに見えるテニス・コートでは若い男がシャツを脱いでショート・パンツ一枚になってラケットを振っていた。(『ノルウェイの森』上 p38)

彼女は水飲み場の前で立ち止まって、ほんのひとくちだけ水を飲み、ズボンのポケットから白いハンカチを出して口を拭いた。それから身をかがめて注意深く靴の紐をしめなおした。(『ノルウェイの森』上 p39)

「螢」と『ノルウェイの森』の間には、奇妙な変換が二つある。「テニス・コート」の場所が遠ざかっていること、「テニス・シューズ」が消されていることだ。

土手を歩いているのは同様だが、「螢」で彼女は「テニス・シューズ」を履き、「テニス・コート」を見ているあるいは横切っている。しかし『ノルウェイの森』で直子は単なる「靴」を履き、テニス・コートは「土手の向こう」へと追いやられる。一見単にテニスと直子のイメージが合わなかったのかと考えられるが、物語の後半で直子は療養所で「テニスとバスケットボール」⁵をしており、それほど違和感があるとも思えない。

なぜ村上春樹はこの場面から「テニス」を遠ざけ、あるいは消したのか。

村上の処女作である『風の歌を聴け』で「テニス・コート」が出てくる場面を思い出したい。

三人目の相手は大学の図書館で知り合った仏文科の女子学生だったが、彼女は翌年の春休みにテニス・コートの脇にあるみすぼらしい雑木林の中で首を吊って死んだ。彼女の死体は新学期が始まるまで誰にも気づかれず、まるまる二週間風に吹かれてぶ

⁵ 直子は手紙で「テニスとバスケットボール」をしたと語るのだが、「バスケットボール」についてしか言及しない。村上春樹がわざとテニスについて語らせなかったのかもしれない、ということも考えられる。

ら下がっていた。今では日が暮れると誰もその林には近づかない。(『風の歌を聴け』
p77)⁶

村上作品における「テニス・コート」には、『風の歌を聴け』の自殺した「仏文科の女子学生」が連想される。ここから、村上が「螢」では無意識に書いていた「テニス・コート」「テニス・シューズ」を、『ノルウェイの森』においては自覚的に遠ざけたのではないか、という仮説が立つ。つまり村上は「仏文科の女の子」と「直子」の関係をできる限り隠したかったため、『ノルウェイの森』において直子から「テニス・コート」を遠ざけたのではないか、ということである。

単なる偶然かも知れない修正にここまで読み取るのは早計かもしれない。そこで以下の箇所にも注目したい。

僕はそんな気持を何度か彼女に話そうとした。彼女なら僕の考えていることを正確にわかってくれそうな気がした。しかし僕にはうまく話すことはできなかった。彼女が最初に僕に言ったように、正確な言葉を探そうとするとそれはいつも僕には手の届かない闇の底に沈みこんでいた。(「螢」 p34)

僕はそんな気持を直子に何度か話そうとした。彼女なら僕の考えていることをある程度正確にわかってくれるんじゃないかという気がしたからだ。しかしそれを表現するための言葉がみつからなかった。変なものだな、と僕は思った。これじゃまるで彼女の言葉探し病が僕の方に移ってしまったみたいじゃないか、と。(『ノルウェイの森』上 p63)

一見同じ内容を語っているように見える。しかし『ノルウェイの森』で変更される前の「螢」の「正確な言葉を探そうとするとそれはいつも僕には手の届かない闇の底に沈みこんでいた」という言葉には、『風の歌を聴け』の冒頭部分を思い起こされる。

しかし、正直に語ることはひどくむずかしい。僕が正直になろうとすればするほど、正確な言葉は闇の奥深くへと沈みこんでいく。(『風の歌を聴け』 p8)

村上はなぜこのような修正を施したのか。やはりこれも「テニス・シューズ」の件と同じように、村上は『ノルウェイの森』を『風の歌を聴け』から遠ざけたかったからこそ、『風の歌を聴け』を彷彿とさせる文言を消したのではないか、と考えられる。さらに踏み込んだ解釈をするならば、『風の歌を聴け』に登場する仏文科の女の子と直子との結びつきを隠したかったのではないだろうか。

⁶ 『風の歌を聴け』(2004年、講談社文庫)参照。下線部は筆者による。

もちろん『ノルウェイの森』は私小説ではないし、実体験を何もかも正直に書いた小説ではない。しかし、「螢」と比較してみて分かることは、村上が『ノルウェイの森』で奇妙に何かを隠そうとしていることだ。

リアリズム小説であるからこそ、事実つまりリアルから小説をむしろ執拗に遠ざけようとした。『ノルウェイの森』には、そんな村上春樹自身の隠蔽の画策が秘められているのではないだろうか。

2. 柳をめぐる隠蔽 ——「めくらやなぎと眠る女」と比較して——

そして僕は柳の夢を見た。山道の両側にずっと柳の木が並んでいた。信じられないくらい数の柳だった。けっこう強い風が吹いていたが、柳の枝はとよとも揺れなかった。どうしてだろうと思ってみると、柳の枝の一本一本に小さな鳥がしがみついているのが見えた。その重みで柳の枝が揺れないのだ。僕は棒きれを持って近くの枝を叩いてみた。鳥を追い払って柳の枝を揺らそうとしたのだ。でも鳥は飛びたつなかつた。飛びたつかわりに鳥たちは鳥のかたちをした金属になってどさっどさっ音を立てて地面に落ちた。(『ノルウェイの森』上 p267-268)

『ノルウェイの森』で、僕が直子のいる阿美寮に行った際見た夢の記述である。「柳」が並ぶ風景というと、「螢」と同じ年に書かれた「めくらやなぎと眠る女」の場面を彷彿とさせる。

彼女は丘を描いた。こみいった形をした丘だった。古代史の挿画に出てきそうなかんじの丘だ。丘の上には小さな家があった。家の中には女が眠っていた。家のまわりにはめくらやなぎが茂っていた。めくらやなぎが女を眠りこませたのだ。

「めくらやなぎっていったいなんだよ」と友だちが訊ねた。

「そういう種類の柳があるのよ」と彼女は言った。

「聞いたことないね」と友だちが言った。

「私が作ったのよ」と彼女が言った。「めくらやなぎの花粉をつけた小さな蠅が耳からもぐりこんで女を眠らせるの」(「めくらやなぎと眠る女」⁷ p163-164)

⁷ 『螢・納屋を焼く・その他の短編』(1987年、講談社文庫)参照。下線は筆者による。引用において「めくらやなぎ」と省略する。

『めくらやなぎと眠る女』は村上によって一度改訂がなされており、83年版と95年版(タイトルは『めくらやなぎと、眠る女』になる)というふたつのバージョンが存在する。83年版と95年版の間には、1987年に著した『ノルウェイの森』がある。本稿では『ノルウェイの森』の原型としての『めくらやなぎと眠る女』を考察するため83年版を参照するが、95年の改訂も注意しつつ読み進めたい。

「彼女」は、『ノルウェイの森』で記される高校時代のエピソードと同じように、十七歳の時、胸の手術のため海岸沿いの病院に入院していた。「僕」と、彼女の恋人である「友人」は彼女を見舞いに行く。

以下は「めくらやなぎと眠る女」に重なる場面を描いた『ノルウェイの森』の中の回想である。

「昔キズキと二人で君を見舞いに行ったときのこと覚えてる？ 海岸の病院に。高校二年生の夏だけな」

「胸の手術したときのことね」と直子はにっこり笑って言った。「よく覚えてるわよ。あなたとキズキ君がバイクに乗って来てくれたのよね。ぐしゃぐしゃに溶けたチョコレートを持って。あれ食べるの大変だったわよ。でもなんだかものすごく昔の話みたいな気がするわね」

「そうだね。その時、君はたしか長い詩を書いてたな」

「あの年頃の女の子ってみんな詩を書くのよ」とくすくす笑いながら直子は言った。

「どうしてそんなことを急に思いだしたの？」

「わからないな。ただ思いだしたんだよ。海風の匂いとか夾竹桃とか、そういうのがさ、ふと浮かんできたんだよ」と僕は言った。（『ノルウェイの森』上 p259）

溶けてしまった「チョコレート」を持っていくこと、窓の外に見えた「ちょっとした林」のような夾竹桃、「いつも雨の降っているような匂い」のする病院。どれも「めくらやなぎと眠る女」に描かれているエピソードである。

しかし詩については、『ノルウェイの森』では「長い詩」としか記されていない。しかし「めくらやなぎと眠る女」を読むと分かるのが、ここで彼女が書いていた「詩」とは、ほかでもない「めくらやなぎ」についての詩である、ということだ。

そう、彼女はその夏、めくらやなぎについての長い詩を書いていて、その筋を我々に説明してくれていたのだ。それは彼女にとっての唯一の夏休みの宿題だった。彼女はある夜見た夢をもとにしてそのストーリーを作りあげ、ベッドの上で一週間かけて長い詩を書きあげた。友だちはそれを読みたいと言ったが、彼女はまだ細かい部分に手を入れてないからという理由で断った。そのかわりに、彼女は絵を描いてその筋を説明してくれた。（「めくらやなぎと眠る女」 p167）

「めくらやなぎと眠る女」において、彼女の見た「夢」の内容については言及されていない。『ノルウェイの森』でも直子の夢の記述はないのだが、直子とこの高校時代の話をした後、僕が「柳の夢」を見る。その僕が見た夢が、本章冒頭に引用した「山道の両側にずっと柳の木が並んでいた」という夢だった。「めくらやなぎと眠る女」の彼女の夢がどのような夢だったのかはわからないが、おそらく「柳」に関する夢だっただろう。ここからも「めくらやなぎと眠る女」と

『ノルウェイの森』がエピソードを類似させていることが分かる。

またこの高校時代の回想だけでなく、「めくらやなぎと眠る女」と、『ノルウェイの森』の阿美寮へ行った時のエピソードについては共通するキーワードがあまりに多い。テニス・コートとバスケット・コートが並ぶ風景や、その先にある芝生や、「時間」の話が重なり合う。

「あまりに何度も考えたせいで、時間の感覚がひきのばされて狂ってしまったのだ」
(『ノルウェイの森』上 p220)

「時間の合わない時計を持ち歩くっていうのも結構疲れるものなんだよ。いっそのことない方がましだって思うこともあるくらいでさ」(「めくらやなぎと眠る女」 p133)

このように見てみると、「螢」ほどではないにしても、「めくらやなぎと眠る女」が『ノルウェイの森』のひとつのエピソードの原型をかたどっていることは確かだろう。⁸しかしそうだとすると、ここでもまた、村上が『ノルウェイの森』で消したものの痕跡が見える。『ノルウェイの森』は、直子が書いていた長い詩が「柳」についての詩であることを消しているのだ。「めくらやなぎと眠る女」においては詳細に綴られている詩の内容について、『ノルウェイの森』では触れずに話題を終える。ただの「詩」としか触れていない。これはまたしても意図的な隠蔽ではないか、と考えられる。

柳というと「風に揺れる木」であるというイメージが強い。『風の歌を聴け』において、「雑木林」の中で首を吊って死んだ「仏文科の女の子」は、風に吹かれて二週間ぶら下がっていた。ここにも「仏文科の女の子」の気配、そしてそれを『ノルウェイの森』で消そうとする村上の意図が見える。

3. 春を憎む僕 —— 「めくらやなぎと眠る女」『風の歌を聴け』と比較して——

さらに疑問なのが、ここで言及されている「めくらやなぎ」とは一体何を指しているのか、という点である。

めくらやなぎの特徴としては、花粉に小さな蠅が運んでおり、その蠅は耳からもぐりこんで女を眠らせるというものがある。そしてその蠅は、女性の体の中に入って肉を食べる虫なのだ。これだけでは「めくらやなぎ」が何を指すのかよく分からないが、彼女が語るエピソードに着目したい。

ある女がめくらやなぎの花粉のせいで眠り込んでいた。その女をたずねて、若い男はひとりで

⁸ 『めくらやなぎと眠る女』と『ノルウェイの森』の関連については、山崎真紀子氏の「直子の乾いた声：村上春樹『ノルウェイの森』論、『めくらやなぎと眠る女』とともに。」(『札幌大学総合論叢 29』2010年)で指摘されている。

丘をのぼっていった。しかし女はすでに蠅に食べられてしまっていた、というエピソードである。

「でも結局のところ、苦勞して小屋に辿りついたのに娘の体はもう既に蠅に食われちゃってたんだろ？」と友だちが訊ねた。

「ある意味ではね」と彼女は答えた。(めくらやなぎ p167-168)

この記述を見ると、丘の上で眠り込んでしまった「女」とは、やはり「彼女」つまり直子自身であると考えて良いだろう。⁹直子はめくらやなぎの花粉によって丘の上で眠り込み、その肉体を蠅に食べられてしまう。「若い男」が友人を指すのか僕を指すのかは断定しかねる¹⁰が、男が苦勞してたどり着いた丘の上では、もう直子は蠅に食われてしまっていた。「めくらやなぎ」の詩はこのような物語として読める。

僕はこのめくらやなぎの話を出して、目の前の十四歳のいところを見ながら蠅のことを考える。彼は蠅を「彼ら」と呼ぶ。

僕はその沈黙の中で、いとこの耳の中に巣喰っているのかもしれない無数の微小な蠅のことを考えてみた。六本の足にべっとりと花粉をつけていとこの耳に入りこみ、その中でやわらかな肉をむさぼり食っている蠅のことをだ。じっとこうしてバスを待っているあいだにも、彼らはいとこの薄桃色の肉の中にもぐりこみ、汁をすすり、脳の中に卵を産みつけているのだ。誰も彼らの存在には気づかない。彼らの体はあまりにも小さく、彼らの羽音はあまりにも低いのだ。(「めくらやなぎと眠る女」 p179)

上の描写を彷彿とさせる場面が、『ノルウェイの森』において、阿美寮のエピソードとはまた別に見える。

僕はまだ桜の花を眺めていた。春の闇の中の桜の花は、まるで皮膚を裂いてはじけ出てきた爛れた肉のように僕には見えた。庭はそんな多くの肉の甘く重い腐臭に充ちていた。そして僕は直子の肉体を思った。直子の美しい肉体は闇の中に横たわり、その肌からは無数の植物の芽が吹き出し、その緑色の小さな芽はどこかから吹いてくる風に小さく震えて揺れていた。どうしてこんなに美しい体が病まなくてはならないのか、

⁹ 『ノルウェイの森』の冒頭(上巻の11頁)には、直子の描写として「ときどき何かの加減で震え気味になる声(まるで強風の吹く丘の上でしゃべっているみたいだった)」と記されている。丘の上の直子、というイメージはこんな風にも反映されているのかもしれない。

さらに『街と、その不確かな壁』(1980年)の中でも「丘の上」の墓地に埋葬されて眠る「君」が出現する。

¹⁰ 95年版では若い男について「それは俺のことだね、きつと」と言った友だちに対して直子は「いいえ、それはあなたじゃないのよ」と述べる。83年版では「彼女はちょっとだけ笑って」続けた、としか記されていない。

と僕は思った。何故彼らは直子をそっとしておいてはくれないのだ？（『ノルウェイの森』下 p200）

肉の甘く重い腐臭に充ちた庭。そして直子の肉体から吹き出してくる「無数の植物の芽」。そしてその芽を震わせ、揺らす「風」。美しい女性である直子の肉体を病ませる「彼ら」とは、「めくらやなぎ」の花粉を持ってきた「蠅」のことを指しているのではないか。そして直子から吹き出してくる芽とは、「めくらやなぎ」の花粉が育ったものだと考えることができる。

『ノルウェイの森』だけを読むと理解し難い箇所であるが、桜から「爛れた肉」の腐臭¹¹を嗅いだり、唐突に「彼ら」という単語が出てくるのは、これが「めくらやなぎと眠る女」のエピソードを基盤にしているからである。『ノルウェイの森』では隠されているが、直子の中には「めくらやなぎ」の「蠅」が侵入している。蠅は耳から入り込み¹²、直子という「めしべ」に受粉させる。一方で蠅は肉を喰らい、卵を産み付けてゆく。そして、直子は眠ったままなのである。

成熟した体という「めしべ」を持つ直子であるが、眠ったまま起きることはなく、そのまま蠅に肉を喰われてゆくというイメージが『ノルウェイの森』と「めくらやなぎと眠る女」には描かれている。このエピソードは、直子が大人になることを拒否する「眠り姫」のようなイメージも重ねられているのかもしれない。¹³

『ノルウェイの森』において僕は腐臭に充ちた庭を前にした縁側から、部屋の中に入る。

僕は部屋に入って窓のカーテンを閉めたが、部屋の中にもやはりその春の香りは充ちていた。春の香りはあらゆる地表に充ちているのだ。しかし今、それが僕に連想させるのは腐臭だけだった。僕はカーテンを閉めきった部屋の中で春を激しく憎んだ。僕は春が僕にもたらしたものを憎み、それが僕の体の奥にひきおこす鈍い疼きのようなものを憎んだ。生まれてこの方、これほどまで強く何かを憎んだのははじめてだった。

（『ノルウェイの森』下 p200-201）

僕は「春」を憎んでいる。『ノルウェイの森』だけを読むと、ここも不思議な文章に思われる。もちろん直子の病状が予想に反して悪化したという報せが届いたのだが、それにしてもどうし

¹¹ 『ノルウェイの森』でレイコさんが昔ピアノを教えていた女の子について話す場面がある。その時レイコさんは彼女について「私もそういう病んだ人たちをたくさん見てきたからよくわかるの。あの子は体の芯まで腐ってるのよ。あの美しい皮膚を一枚はいたら中身は全部腐肉なのよ」（下 p30）と述べる。病んでいる人間の体が「腐る」、「腐肉」であるという表現は村上作品に多く見られる表現である。

その背後には、「二週間」放置されていた「仏文科の女の子」のおそらく腐っていたであろう死体のイメージが見て取れるのではないか。

¹² 直子は幻聴に悩まされている。「耳から入ってくる蠅」が連想される病である。

¹³ 山根由美恵「滅びに向かうものたち：村上春樹「めくらやなぎと眠る女」と一九八〇年代」（『近代文学試論(49)』2011年）で、「成熟を拒否する」ことの隠喩としてめくらやなぎと蠅が出てきていると説明されている。

てここまで強く春を憎むのだろうか。¹⁴

しかしこれも「めくらやなぎと眠る女」という補助線を惹くと合点がいく。僕にとって、蠅が連れてきた「めくらやなぎ」が直子の中で芽吹く春とは、桜の花が開花し、その腐臭が匂ってくる春だからだ。蠅が女の体でやわらかな肉をむさぼるイメージがあるからこそ、僕は春に腐臭を感じてしまう、ということである。

またこの手紙を僕が受け取った日付に着目すると、1970年4月4日だ¹⁵。この日付はほかでもない『風の歌を聴け』で「仏文科の女の子」が自殺した日付¹⁶なのである。僕が「これほどまで強く何かを憎んだのははじめてだった」とまで言う春の日であり、「僕の体の奥にひきおこす鈍い疼きのようなもの」を抱える4月4日。この日付が「仏文科の女の子」が自殺した日と同じ日であることは、偶然ではないだろう。

『ノルウェイの森』において直子は1970年8月26日に自殺する。これはしばしば指摘されるように『風の歌を聴け』の「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る。」という一節と同じ日付を示している。しかしこの日付はあくまで表向き、つまりは読者の気を逸らすために作った日付だったのではないか。

村上は「1970年4月4日」という日付を隠すために、あるいは直子と仏文科の女の子との関係を隠すために、あえて直子の自殺した日を『風の歌を聴け』の終わりと同じ8月26日にしたのではないか。「蛍」「めくらやなぎと眠る女」「風の歌を聴け」という補助線を引いたうえで『ノルウェイの森』を読むと、そのような推測が的外れではないことが分かる。

おわりに

店を出て、僕たちは不思議なくらい鮮明な夕暮の中を、静かな倉庫街に沿ってゆっくりと歩いた。並んで歩くと、彼女の髪の毛のヘヤー・リンスの匂いが微かに感じられる。柳の葉を揺らせる風は、ほんの少しだけれど夏の終りを思わせた。しばらく歩いてから、彼女は指が5本ついた方の手で僕の手を握った。

「いつ東京に帰るの？」

「来週だね。テストがあるんだ。」(『風の歌を聴け』p136)

¹⁴「日曜日の午後七時、空は突き抜けるように青かった。足もとの芝は春までの東の間の死の予感に充ちていた。」(『1973年のピンボール』(講談社文庫) p181)

村上の二作目である『1973年のピンボール』にも、このような記述がある。もちろん内容としては死の予感は「春まで」と言っているのだが、たしかにこの中で「春」と「死」は結びついている。

¹⁵「四月四日の午後に通の手紙が郵便受けに入っていた」(『ノルウェイの森』下 p196)

¹⁶加藤典洋『イエローページ村上春樹』(1996年、荒地出版)

本稿2章で見た「柳」は、『風の歌を聴け』において上のように登場している。柳の葉に吹く風は、夏の終わりを思わせる。故郷の街で、もう東京へ帰ってしまう「僕」の手を握る「小指のない女の子」は、その前に店でこのように述べる。

「ねえ、私が死んで百年もたてば、誰も私の存在なんか覚えていないわね。」
「だろうね。」と僕は言った。(『風の歌を聴け』 p136)

彼女の言葉は、どこか『ノルウェイの森』の直子の言葉と重なる。

「私のことを覚えていてほしいの。私が存在し、こうしてあなたのとにりにいたことをずっと覚えていてくれる？」

「もちろんずっと覚えているよ」と僕は答えた。(『ノルウェイの森』上 p20)

もちろん直子は知っていたのだ。僕の中で彼女に関する記憶がいつか薄らいでいくであろうことを。だからこそ彼女は僕に向って訴えかけねばならなかったのだ。「私のことをいつまでも忘れないで。私が存在していたことを覚えていて」と。(『ノルウェイの森』上 p22-23)

1970年4月4日に自殺した「仏文科の女の子」は、姿を変えて村上作品に登場する。小指のない女の子、誰とでも寝る女の子、そして直子。『ノルウェイの森』は彼女のこともっとも詳細に記した小説であると言える。

しかしそれゆえに、村上春樹は彼女の影を隠したがっていた。リアリズム小説であるからこそ、村上には直子という架空の女性を小説のヒロインとして描かなくてはならなかった。そこで、まるで森の奥に隠すように、直子にまつわる「仏文科の女の子」の話は丁寧に隠されることになった。それまでの作品には出てきていた様々な「仏文科の女の子」(をもとにした女たち)の痕跡をひとつひとつ消すことで、村上春樹は『ノルウェイの森』というひとつの架空の小説を生んだと言えるだろう。

それでも作家の意図とは裏腹に、『ノルウェイの森』における春の季節、直子に関する描写や台詞には、「仏文科の女の子」の痕跡が残っている。

十月の風はすすきの穂をあちこちで揺らせ、細長い雲が凍りつくような青い天頂にぴたりとはりついていた。空は高く、じっと見ていると目が痛くなるほどだった。風は草原をわたり、彼女の髪をかすかに揺らせて雑木林に抜けていった。(『ノルウェイの森』上 p9)

そしてそれは『ノルウェイの森』だけでなく、「仏文科の女の子」の記憶は、「風」を伴いなが

さまざまな村上作品に登場する。

背筋をまっすぐのばして目を閉じると、風のおいがした。まるで果実のようなふくらみを持った風だった。そこにはざらりとした果皮があり、果肉のぬめりがあり、種子のつぶだちがあった。果肉が空中で砕けると、種子はやわらかな散弾となって、僕の裸の腕にのめりこんだ。そしてそのあとに微かな痛みが残った。

風についてそんなふうにしたのは久しぶりだった。長く東京にいるあいだに、僕は五月の風が持つ奇妙な生々しさのことをすっかり忘れてしまっていた。ある種の痛みの感触さえ、人は忘れ去ってしまうものなのだ。肌のにめりこんだ何かが骨を浸すあの冷やかささえ、みんな忘れてしまう。(「めくらやなぎと眠る女」 p129)

「螢」『ノルウェイの森』において、キズキが死に、直子と再会したのは五月だった。「めくらやなぎと眠る女」においてもなお、五月の「痛み」を残す風が描かれている。村上春樹の描く主人公は、繰り返し「風」を感じながら、忘れてしまったがゆえに忘れられない「痛み」——「仏文科の女の子」のことを思い出している。

【三宅 香帆 (日本文学)】